



甲冑師

森崎千城が語る

武将と甲冑の美学



もりさき たてき

昭和三十九年岡山県生まれ。明治三十五年創業の甲冑・武具「森崎」三代目当主。多くの美術館・博物館等の甲冑・武具修復や国宝の復元、修復製作を行う。国宝、重要文化財の復元、修復製作を手がけているのは全国でわずか六人。最年少ながら二領の国宝（紺糸威大鎧、赤韋威大鎧）の復元製作という偉業を達成する。現在では活躍の場を海外に広げ、国内外から注目される日本屈指の甲冑師。

死する覚悟で戦場に赴いた武士にとつて死装束でもあった甲冑。武士の想いと卓越した甲冑師の技術が織りなす総合芸術品だ。甲冑師 森崎千城が初めて語る「武将と甲冑の美学」

六人

「今度、大三島にある国宝、紺糸威大鎧を復元することになった。後を継ぐ気があるなら、いい機会だから帰ってこないか」

僕にとつて、父からのこの一言が甲冑師となるきっかけとなりました。

一九〇二年（明治三十五年）に祖父が創業して以来、父、叔父、親戚も甲冑師の家庭で育ち、二十六歳まで東京でサラリーマンをしていました。後を継ぐことはどこかで考えていた

北条家伝来
本小札紫糸裾濃威丸胴丸具足
安土桃山時代の甲冑を江戸時代後期に仕立て直し。替え袖や采配・毛靴・足袋・わらじまで揃った皆具である。



金小札紅糸裾濃威大鎧 江戸時代中期(兜鉢・鎌倉時代中期) 備後福山藩三代藩主阿部正右所用
 明和四年(一七六七年)に明珍宗政・宗益父子に命じて製作
 「全江戸期甲冑十傑の一つであると称えられてきた名物甲冑」

のですが、自分一人の力でどこまで出来るか試してみたかったんです。

この世界に入って今年で十九年目。国宝や重要文化財の修復や復元を手がける甲冑師は僕を含めて全国でわずか六人しかおらず、その中で最年少とされています。甲冑師には資格も免許もありません。お祭りなどで着る鎧を修復する、自称甲冑師の方は大勢いますが、国宝や重要文化財を手がけているのは現在、この六人だけです。

僕の年代は、ヤンキー世代ですが、それにはあまり影響されず、ごく普通の少年でした。幼少の頃から家に甲冑があることは普通だと思っており、友人の家に「なんで鎧がないのか」と不思議に思ったほどです。

甲冑に相当馴染んでいましたので、後を継ぐ際もとくに変わった仕事のように感じず、ごく自然に

入ってゆきました。

岡山県重要無形文化財保持者であった父に弟子入りしてからの三年間は休みも、給料もなく働き詰めの毎日でした。お金がないから仕事をするしかないんです。今考えると良い循環だったと思います(笑)。

父は技術を教えることを全くしません。自分で技を見て、盗んでは覚え、仕事が終わってからは父の知らないところで書物を読んで勉強しました。とにかく毎日必死でしたね。

ただ書物を読んだのは、技術を習得する目的よりも、父に認めてもらいたいという思いがあったんです。いつもヒヨツ子扱いされていましたから、せめて半人前にも認めてもらいたい。「あいつ、教えてもいないのにどこで勉強したんだ」と父を驚かせたかったんです。

転機が訪れたのは二〇〇二年(平成

鉄十二枚張星兜鉢

鎌倉時代初期

当時の形を残した兜鉢として、民間の中では最も古いものの一つである。平安時代から鎌倉時代までは、兜鉢の頭頂部に天辺の穴(てへんのあな)と呼ばれる大きな穴があいていた。当時は髪を結い髷(まげ)をつくって烏帽子を被り、天辺の穴から髷(もとどり)を出していた。「平家物語」にはこの穴より矢を射られぬよう注意を促す一文がある。時代とともに穴は小さくなっていく。



鉄黒漆塗二十四間二方白星兜鉢

鎌倉時代中期

江戸時代に明珍系の甲冑師によって改補されたと推測されるが、鉢自体は典型的な鎌倉時代の兜鉢である。



鉄黒漆三十二間四方白総覆輪阿古陀形兜鉢

室町時代中期

室町時代の総覆輪阿古陀形兜鉢のうち、四方白(しほうじろ)として珍品に属する貴重な遺品。作風も高級感が漂う。

十四年)、三十八歳のときです。二度目の国宝の復元製作として岡山県立博物館所蔵の赤韋威大鎧あかがわおびのおよろいに使用する材料を集めているとき、父が病に倒れたんです。

覚悟

まだ作業の一割程度しか進んでおらず、そこから先は一人でやらざるを得なくなりました。今ではあの時の経験がとて大きく感じますし、自分にとって良かったと思っていま

す。一人でやらなくてはならないと覚悟が決まりましたから。ただ一方では動揺もしましたし、完成するまでに何度も「もう出来ない」と落ち込んだものです。「こんなに大変だったら、もう甲冑師は無理だ」と心底思いました。その都度、「神様は乗り越えられない試練は与えないんだ」と自分を奮い立たせながら、

なんとか乗り越えてきました。本当に大変な作業でした。

病に倒れた父が、ある日、病院から一日だけ許可をもらい「一つだけ教えていけないことがあるから、今日は付き合え」と言って、漆の溶き加減を教えてくれたことがあります。のは後にも先にもこのときが最後で、今でも忘れられない大切な思い出です。

僕の仕事を見守り、父は他界しました。鎧が完成したとき、博物館からは一日でも早く納めてほしいと言われていたのですが、一日だけ父の仏壇の前に飾り「出来たよ」って見せてあげたんです。

甲冑師にとって、国宝の復元製作は一生に一度出来るかどうかの大仕事なんです。僕の場合は紺糸威大鎧と赤韋威大鎧の二領の国宝に携わ

鉄錆地縦刻板二十八間筋立桃形兜鉢
江戸時代中期
正面には漢字(漢文)をデザイン化した切金が付いている。



鉄錆地沢瀉形兜鉢
安土桃山時代～江戸時代初期
沢瀉(おもだか)の葉の形に鉄を打ち出した変わり兜。
植物をモチーフとした兜には朝顔形や馬蘭(ばりん)形などがある。



朱漆塗六十二間筋兜(銘・高義)
室町時代後期
名工、高義により作られた兜。
高義の卓越した技量が窺える傑作である。



たわけですが、これは全国で二人だけのことで、とても名誉なことだと思っっています。

復元製作は、オリジナルのことを本歌と呼び、本歌と同じように図面を作り、同じ材料を調達することから始まります。

そして古来と同じ手法で製作してゆくんです。このとき、本歌の歪みや凹み、不揃い、重量まで全て忠実に復元してゆきます。当然、歪みや凹みなど作らず真っ直ぐに作る方が簡単なんです。全て厳密に本歌通り作る作業が復元製作なんです。

赤韋威大鎧の場合は最初の図面作成に一ヶ月程かかりました。博物館に九時から五時まで毎日通い、国宝ですから素手で触れないように、上から布を被せて慎重に寸法を測ってゆくんです。

漆を塗り重ねた小札こざねと呼ばれる牛

皮の板を編んでゆく作業があるんですが、本歌の牛皮が三ミリで、現在の牛舎で育った牛の皮は二ミリしかないんです。非常に困難な作業でした。兜の内側にある和裁わざいも摘まみながら球体になるように縫ってゆく。一日が終わっても思ったほど作業が進まないで「今日、自分は一体何をしたんだろう」と思ったりもします。ただ鎧はひとつひとつの作業の積み重ねで出来ていますので、根気強くこなしてゆくしかないんです。

よく何が一番難しいですか、どんなことに苦労しますかと聞かれるんですが全部なんです(笑)。全部大変で、全部難しい。

鉄を自在に形作る打ち出しの技術、彫金、漆工芸、溶接、鍍金とくごん、箔押し、組紐、染色、和裁わざい、威しおどし(糸を通す)……数え切れないほどの技術が甲冑師には求められます。それを今



鉄黒漆塗錐形兜

安土桃山時代

左右に描かれた「大」「小」の文字は大きいものから小さいものまで、全てを錐のごとく貫き通す想いを表している。



鉄打出黒漆塗木菟形兜

安土桃山時代

木菟(ミミズク)、フクロウ科の鳥をイメージした変わり兜。ミミズクの語原は「耳付く」や「耳突く」など「耳」を主とした説が多い。

日は鉄の打ち出し、明日は彫金というわけにはいかず、漆が乾いている間に染色をして、彫金が終わったら威しをする。一日に色々な職人の仕事を全部一人でこなさなくてはなりません。

金工家なら金工だけ、漆芸家も漆を塗ることに長けていれば食べてはいけるのですが、甲冑師は全てのことをマスターしなければなりません。それでその分お金を貰えるかというと、決してそうではないんです(笑)。甲冑師が非常に少ない理由は簡単です。

仕事が大変な割に身入りがありません。結局、身入りがよかつたら大変な仕事でも若い人が育ちます。やるのが沢山あるのに身入りがなく仕事もない。これでは後を継ぐ人も育ちません。

無形文化財になると国からいくら

か援助はありますが、基本的には公的な援助はありません。お金の援助も大切なことですが、それ以上に、技術を発揮する場を多く与えてほしいと思います。

伊勢神宮は二十年に一度、神宮の本殿などが建て直されますが、あれは技術の伝承のために建て替える意味もあるんです。十年に一度でも国宝の復元依頼があるなど、需要の面でサポートしていただきたいですね。

海外

甲冑はすぐ壊れるものではないので、父の代までは生活の糧として五月人形を作っていました。僕はあくまでも本物を作っていたかったの今はおこなっていません。

僕は海外での仕事を中心ですが、お客様も海外の方がとても多く



鉄錆地置手拭雑賀兜

江戸時代初期

あたかも手拭を頭に載せたような形から置手拭形と呼ばれる。雑賀(さいが)衆が好んで用いたとされている。



鉄錆地菊形兜(銘・明珍宗廣)

江戸時代後期

菊の花弁を兜鉢に、菊の葉を脇立てにした斬新なデザインである。



割蛤形兜

江戸時代初期

割った蛤の貝を裏返した形がモチーフとされている。魚介類ではこの他に大地の信仰と結びついた鯰(なます)をモチーフとした鯰尾形、縁起の良い鱸(しゃち)をモチーフとした鱸形もある。

いらっっしゃいます。

甲冑の保存の仕方など、海外では方法がわからずに困っている方が多くいらっっしゃるんです。修復の方法を博物館の人に指導しています。漆は乾燥しているとヒビが入り、鉄は湿気があると錆びますからね。悪い赤錆びを防ぐために小さい錆びをわざと作るなど、その方法は多岐に渡ります。

修復以外にも甲冑を譲ってほしいとの依頼も多く、海外の方にはとくに変わり兜というのが人気です。お客様はフランス、イタリア、ベルギーといったヨーロッパの方から、ロシアやアメリカの方など幅広くいらっっしゃいます。海外では若い方も甲冑が大好きなんです。友人もいて「いつでも遊びに来てほしい」と誘いを受けることも多々あります。日本よりも海外の方が僕の知名度は高いで

すね(笑)。

海外へ行くと感じることですが、文化に対して国の考え方が全く違います。国家予算から文化財に割く予算の割合は、日本はフランスの十分の一なんです。日本の場合は博物館などから修理の依頼が来ても、まず見積りを取り、値段の安い方に決定する。なぜ美術品や芸術品を金額の安い方で決めるのか理解出来ません。予算や納期のことばかりで、技で競うという意識が低いんです。

一方、海外ではきちんとした仕事をする人に対しては、きちんとした評価をします。ちゃんとした仕事にはちゃんとした報酬も払う。日本には職人の一億円プレーヤーはなかなかいないと思うのですが、海外に行くとき普通にあります。もちろんお金だけの問題ではありません。



朱漆塗二枚胴具足 安土桃山時代
真田の赤備えを連想させる赤具足である。

「これだけの予算しかないが、森崎さんにしか出来ないから、なんとかやってほしい」と言われたら引き受けます。

赤韋威大鎧あかがわおびおほよろいは二千万円で復元製作を受けたんですが、二年がかりで大赤字。日本では昔から宵越しの金は持たないという職人気質かたぎが続いています。国くにの文化に対する考え方が違い過ぎます。

感性

それと教育です。例えば外国では公立の博物館はほとんど無料です。写真も撮れて、椅子を持って行ってスケッチも自由に描ける。好きな子は毎日のように通うことが出来るんです。博物館を子どもたちの教育のために作っているという意識があるんです。

日本は課外授業で博物館へ行くと、

ただ一列になって順番に見るだけです。気になった絵を立ち止まって見ていると、先生から「早く進みなさい」と注意される。あんな画一的な教育では感性もなにも育ちません。

岡山おかやまの博物館では、年に二回、文化の日とこどもの日に、子どもたちに鎧を着せる催しを開催しています。すると応募が殺到するんです。実際に鎧を着せてあげ、昔の武士がどのくらいのものを着ていたのか重さを実感してもらおう。子どもたちはすごく感性が鋭いので実物に触れさせてあげると感じるものがあるんでしょう。甲冑にとっても興味を持ってくれるんです。日本人は伝統的なものに対する思い入れを遺伝的に持っているのかもしれない。

実用性だけを見ると西洋の鎧が優れている面もありますが、日本の甲冑は武士の美意識、精神性、心意気



赤韋威大鎧(あかがわおとしおおよろい) ※高梁市歴史美術博物館蔵
 本歌の国宝は、承久の乱(一二二一年)後、備中穴田郷(高梁市宇治町)に新補の地頭として来住した赤木氏の伝来品で、製作当時の姿をほぼ維持する全国唯一のものである。鎧を構成する小札は三目札(みつめざね)という大型のもので、その総数は千八百枚を超える。日本の工芸史上、極めて貴重な遺品である。



思い入れが全て取り入れられていません。なおかつ身を守るだけではなく、死する覚悟で戦場に行く死装束でもあったわけです。武士が各々の想いを込めて依頼し、卓越した技術を持つ甲冑師が製作する総合美術品です。間違いなく日本の甲冑は世界一です。

材料も、鉄・金・銀・胴・真鍮、牛革・鹿革・絹・綿・漆・染料……と実に様々です。甲冑ひとつ見れば

当時の技術レベルが全てわかるとさえ言われているんです。

赤韋威大鎧には胴の部分に「撫子」の花を圖案化したものが描かれています。撫子は女性のイメージが強い花ですが、実は武士を象徴した花なんです。一つの茎に一つの花しか咲かないという意味で、古来わが国では一茎一花、つまり二心を持たない代表の花でした。一度仕えた人を決して裏切らない、武士道の精神です。

この鎧を身に纏っていた武士はそれを全面に表現し、そういう武士でありたいと願ったのでしょう。

撫子の花のほかに、パツと咲いてパツと散るところから潔さの象徴として桜、勇猛果敢な獅子、勝負との語呂合わせから菖蒲などがあります。精神的なものや心意気が色々と表れており、その中で美意識を追求している。



総髪形兜(慈姑葉脇立付き)
江戸時代初期
大きな慈姑葉をイメージした脇立が付属している。

昔は戦の後、無事を感謝し、鎧や太刀を神社に奉納していました。武士にとって命の次に大切なものといった気持ちがあつたのでしよう。

鍬型

その気持ちは鎧の数え方にも込められており、鎧は領土の「領」という数え方をします。昔は領土を求めるために命懸けで戦っていたわけですから、それに匹敵するものだというところで、物の数では一番大きな単位かと思えます。唯一、「土佐一国にも代え難し」と山内家二代藩主忠義が將軍家への献上を断った名刀、備前国長船兼光が一国となつていますが、基本は刀が一振り、鎧は一領です。

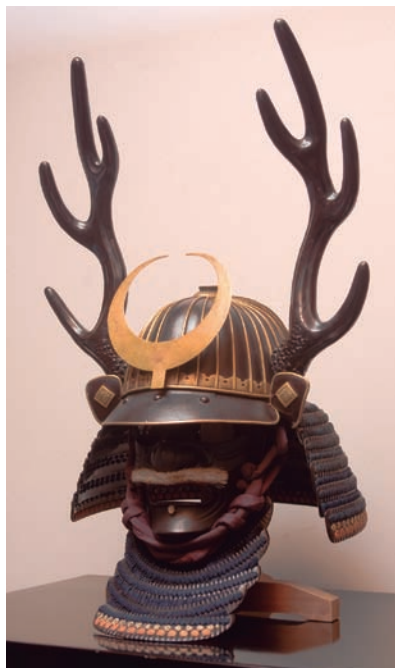
フである鍬を兜の天辺に付けて常に彼等を忘れず戦いに行く。我々は百姓あつての武士だ、という思いが込められていました。

「つの」など兜の装飾品は非常に合理的に作られており、かりに枝にひっかかってもすぐに抜けるようになっていたり、折れて身が助かるように紙や革、木などで出来ています。室町時代の末期から戦国時代にかけて徐々に形も変わってモチーフが造形的になります。

戦国時代になると戦い方が集団戦法に変わり、同じ兜を被っていると誰だか認識できず、手柄を立てたときに問題がありました。今は直江兼続の「愛」の文字が有名ですが、慈姑の葉のような植物であつたり、鹿の角といった動物がモチーフになるなど奇抜なデザインの兜を被って自己主張をするんです。



鉄黒漆塗和冠形兜 江戸時代中期
冠に似せて作られた美しさの際立つ兜である。



鉄錆地塗三十二間総覆輪兜 江戸時代中期
鹿の角をモチーフとされた脇立は紙と漆で出来ている。

一枚打出錆地塗総面(銘・明珍紀義久作)
江戸時代末期
面類は大きく分類すると総面・目の下頬・半頬に
分けられる。



兜以外でも鎧に筋肉隆々の模様が描いた仁王胴、顔に着ける面類など全身で個性を表現しました。面類は顔の防具のように思われているんですが、被ることによって年齢や性別を分りにくくする効果もあった。厳めしい面類をつけ、強さをアピールして相手を寄せ付けない。強い人は美女頬、翁面をつけて相手を油断させる狙いもありました。筋肉隆々の仁王胴や厳めしい面類は華奢な人が身に着けていたのかもしれませんが。今も人それぞれに個性があるように、昔も武士一人ひとりに個性があったんです。時代ごとに様々な人間模様が伺えて面白いです。僕は特定の好きな武将がいるというよりは、それぞれの武将に好きなところを感じます。

武田信玄に敗れた徳川家康はおもろしをしながら浜松城に戻り、苦渋の表情をした肖像画を描かせ、自分に對する戒めとした。上杉謙信は片方では人を切り、片方では仏門に入っていた。家康は自分の弱さをみせ、謙信は精神的に上手くバランスをとっていたのではないのでしょうか。すごく人間味を感じます。僕も手は真つ黒になり、汗だくになって仕事に没頭する。そういう意味では普段の生活が非常に地味なんです。普段が地味な分、プライベートでは華やかなことが好きなんです。ファッションも好きですし、謙信と同じようにどこかでバランスをとっているのかもしれない(笑)。今でこそ一番の趣味が甲冑と言っています。最初からこの仕事が好きでなく好きになっただけではなかったんです。

鳶類
江戸時代後期
鳶の嘴(くちばし)のように、下顎まで鼻が伸びている。



烏天狗形兜
室町時代後期
素材は、鉄・革・乾漆で出来ている。
奇抜な意匠の兜の中でも、圧倒的な存在感を持つ不気味な兜である。
頭と顔をすっぽりと覆うフルフェイス式の兜でとても珍しい。同様のフルフェイス式は、兵庫県豊岡市の出石神社にある猿形兜が有名。



鉄鑄地金銀象嵌六枚張雜賀兜（蜂須賀家伝来）安土桃山時代
装飾に贅を尽くした最も華やかで最も美しい本雜賀兜として有名な逸品である。

す。この仕事にのめり込むようになったのは、昔の技術に直接触れたことが大きかったと考えています。昔の甲冑師の仕事からは本当に手を抜いていないことが伺えます。全く見えないところでも一切手を抜かず正確に仕上げている。見えないところに手を抜かないのが、甲冑師であり職人です。

足跡

今は建造物でも蓋をあけたら手抜き工事だったり「誰も見ていないからいいんだ」といったように杜撰な設計をしています。昔の物を見てみるとそんな考えは出来なくなります。やはりものづくりは正直です。手を抜けばすぐわかる。手を抜いていないからこそ何百年も残っているんです。僕が作った作品も何百年経っても残ることを考えると感慨深

いものがある。自分の足跡を残せることに大変なやりがいを感じます。いつも心掛けていることは手を抜かないことです。日々真面目にコツコツと仕事をする。特別なことは何もしていません。気負ってこれをするぞという思いもありませんし、今後の目標も、この甲冑をどうしても作りたいというのはいんです。

ただ……、父親が亡くなる前に病室で言ったのです。「仕事がしたい。ここに道具と材料を持って来てくれないか」と。最後の最後まで、父は甲冑師だったと思えました。そんな誇りと情熱を持ち続ける甲冑師になりたいと思っています。

人間国宝の方の話では、まず精神統一、お風呂に入り、それから仕上げに取りかかると聞きましたが、僕はそういうのが何もない。一所懸命、目の前にある仕事を真面目にこなし



鉄鑄地六枚張筋伏茄子形兜 江戸時代初期
茄子をモチーフとした変わり兜である。
この他にも瓜形、柿形、柘榴（ざくろ）形などがある。



鉄鑄地百二十間筋兜（銘・正久）江戸時代中期
百二十枚の鉄の板を、リベットし作られた精緻な兜である。

紋柄威二枚胴具足

安土桃山時代

集団戦においても一目で識別出来るほど、大きな白抜きの紋柄と鏝の前立が特徴である。



破損した籠手の鎖帷子を、一つひとつ丁寧に繋ぎ合わせている。非常に細かく根気のいる作業。



ていくだけです。甲冑は小さな部品の集合体なので日々の積み重ねで完成する、根気がいる仕事です。

甲冑師に必要な資質も真面目で手を抜かないことです。今まで「まあこの程度でいいか」など考えた事はありません。自分が今出来る最大限まで仕事をしています。

一度でも僕に仕事を依頼してくれた方は、次回から全てを任せてくれます。自分の仕事に対して自信と誇りを持っています。

現代の人は時間や採算を考え過ぎている気がします。今でも命懸けでやれば何でも出来ると思うのです。予算や納期のことばかり考え、結果として「まあこの辺りでいいや」と思ってしまう。これではいい仕事など出来ません。

物を作る人は仕事のレベルを自分で決めているんだと思います。ここ

でいいやと思うか、もつとも思うか。依頼者の方から「もういいですよ」と言われることがあるんですが、自分としては納得できるレベルまでゆかないと作品として出したくないんです。全ての仕事は渾身の作なのです。

「出来ない」と思う瞬間はあるんですが、その都度、生前、父がよく言っていた「人に出来たことは自分にも出来る」という言葉に励まされ、最後までやり通して来れました。父は先人が作ることができたものは自分にも絶対出来る、という信念を持って仕事をしていました。

父から受け継いだものを、今度は僕自身が伝えて行く立場にあるのですが、現在は弟子を取っていません。過去には取っていたのですが、責任がある仕事ですから、どうしても厳しいことを言わざるを得ない。

一般に徒弟制度とていせいどと言えば厳しく感

室町時代後期

本小札紺糸威胴丸(大袖付き)
 室町時代後期
 先代の森崎昌弘が室町時代の胴丸を仕立て直した甲冑である。



じると思いますが伝統や文化というものは、厳しい環境の中で脈々と伝えられてきたものです。
 修行時代は父にとっても厳しくされましたが、今思えば優しさだったと思います。今は厳しさについてこれる人がなかなかいません。

武士

若い人に対して特に感じることは、技術ではなく考え方の問題です。作業の指示を出す時「教わったことがないものは、やり方がわからないので出来ません」とまず出来ないことの言い訳を考えてしまふ。普通はどうしたら出来るかを考えますが、教わっていないという大義名分があるため平気で言い訳をする。それが当たり前になってしまっているんです。

父からは、最後に漆の溶き加減を

教わった以外は、こうしろ、ああしろと言われたことはありません。僕自身「なんで教えてくれないんだ」と思ったこともありませぬ。職人はそれが当たり前だと思っていました。人によっては遠回りをしないように、手取り足取り何もかも教える人もいます。当然、早く習得できるようにするのは教えてもらった方だとは思いますが、ただし教わる習慣ができてしまえば教わったことしかできな



紅糸威腰取黒革胴丸
 室町時代後期
 (仕立直し・安土桃山時代)
 仕立て直しはされているが、室町時代の胴丸の遺品は大変貴重である。正面に梵字(ぼんじ)の切金がある。甲冑は神仏混合でもあった。



室町時代後期

本小札色々威腹巻(大袖・喉輪付き)
室町時代後期
スタイルや色彩など現代にも通じる美意識を
感じさせる甲冑である。



国宝・紺糸威大鎧(平安時代末期)＝復元製作



紺糸威大鎧(こんいとのおおよろい)
※愛媛県歴史文化博物館蔵
本歌の国宝は、源平合戦で活躍した伊予国守護職河野通信が戦勝御礼のため奉納した。平安時代末期の作。平治合戦絵巻にみえる大荒目の鎧で、日本三大鎧の一つである。

くなってしまう恐れがあるのです。
僕の師匠は半分が父ですが、半分は物なんです。趣味で買い集めた甲冑も、実物を触って研究する教科書代わりに使っています。物を分解し、先人がどういうやり方で、どんな道具を使っていたのかをとことん考える。遠回りだと思いますが、非常に大事なことだと思っています。

甲冑を通して、色々なことを学びました。

手を抜かない真面目さを教えてくれたのも甲冑ですし、武士の心意気を教えてくれたのも甲冑です。僕も武士のように潔い生き方が出来たらいいな、と甲冑を作りながらいつも思っています。

海外の方が来て、日本の文化をごっそり買って行くのを見ると内心複雑な気持ちになるんです。日本人

にも、もう少し自分の国のことを知ってほしいと思います。自分の国の文化や歴史に興味を持ってもらうことはとても嬉しいですし、そのきっかけが甲冑だともっと嬉しいですね(笑)。

甲冑はまだまだ一部の愛好家のものなので、一般の方にはなかなか知られていません。値段が高そうとか、お店にもフラットとは入りにくいところがあるのかもしれない。

近年は歴史ブームということで「歴女^{れきじょ}」と呼ばれる方もいらつしやるようですが、歴女の方にはなかなかお店に来ていただけません(笑)。

ただ、どんな形であれ日本の歴史や文化に興味を持っていただけるとは大変嬉しいことです。自分の国の文化の一つである甲冑に一人でも多くの方に触れてほしい。今はその思いが強くなります。